

「国語国文学研究」第四十八号 抜刷
平成二十五年二月十二日 発行

狂言ことばの変遷

—その諸相と要因—

坂
口
至

狂言ことばの変遷

——その諸相と要因——

坂口 至

一 はじめに

亀井孝「狂言のことば」(『能楽全書五 狂言』所収、昭十九)は、昭和十九年当時に、見ることできた狂言の資料—当時実際に上演されていた狂言の詞章と、『狂言記』の四種類の本、そして雑誌に翻刻された『大蔵虎清本』—を用いて、狂言のことばの特質について論じたものである。この論文の最も大きな価値は、中世以来の狂言のことばの変遷を、大きく三つの類型に分類し、それぞれの特徴を明らかにしたことだと考えられる。三つの類型とは、一つは伝承芸能の宿命として当然の、前の時代のことばの継承、もう一つは、時代とともに変容して行くことばの新たな撰取、そして三番目が、前時代のことばと当代のことばとの共存の後の、前時代のことばへの意図的回帰—亀井氏はこれを「復古的修復」、あるいは「擬古的粉飾」と名付けている—である。このうち、特に三番目の類型の指摘は、氏の鋭い洞察力を物語るものとして知られている。氏の論文から六

十年以上経った今日、公開された狂言の資料も格段に増え、当時よりもはるかに有利な研究環境にあるが、氏が明らかにした三つの類型をもとに、さらに細かな実態に踏み込んだ研究というのはほとんど出ていないようである。本稿では、亀井氏の類型に従いつつ、これまで指摘されていない狂言ことばの変遷の諸相の一端を明らかにし、あわせてその変遷の要因についても考えてみたいと思う。

二 狂言ことばの変遷(一)

—前時代語の継承—

まず、類型の一、狂言ことばの変遷における前時代語の継承の実態について見て行くことにする。その(一)として、現代狂言のことばが、狂言が発祥した中世のことばをどの程度継承しているのか、音声と文法の面からざっと見渡しておきたいと思う。まず次の(a)は、中世中期頃から末期頃にかけての口

語の音声的特徴と、現行狂言のことばの音声的特徴を比較したものである。

	(a) 音 声 事 項 (中世中期～末期)	現行大蔵流	現行和泉流
	* 母音「[j'e]」オ「[w'o]」	×	×
	* サ・ザ行エ段音「[j'e]」[ʒ'e]	×	×
	* 八行子音「[θ]」	×	×
	* オ段長音の開合「あう」～「[o:]」[おう]～「[o:]」	×	×
	* 四つ仮名ジ「[ʒi]」ヂ「[dʒi]」ズ「[zɯ]」ヅ「[dʒɯ]	×	×
	* 合拗音「[kwa]」[gwa]	×	×
	* iu 連母音の「割る」発音「[j:u:kɯ]」(秀句)	×	×
	* 連声「去年はくキヨネンナ」「今日はくコンニッタ」	○	○
	* t 入声の「呑む」(「含む」) 発音「大仏のくダイブツノ」	△	×
	* 八行四段動詞終止連体形「使ふくツコー」「歌ふくウトー」	○	○
	* 打消仮定「読マズワ」「知ラズワ」	△	×

この表において、○は現行狂言で一般的に用いられる発音、△は部分的に、または一部の流派・家で用いる発音、×は用いられない発音を示す。

これらの音声事項は、ほとんどが中世末期までは当時の都であった京都での正式な発音だったと考えられるもので、その多くが近世に入って失われ、現代の発音と同じになってしまったものである。表を一覧して分かるように、現代の狂言は中世末

期頃の古い発音の多くを失ってしまっている。これらの中で、「秀句」をシ・ウ・クと発音する、いわゆる「割る」発音と呼ばれるものは、能の詞章の発音には残っているものであるが、狂言の発音では失われたものである。一方、狂言の発音に明確に残されているものに「連声」があるが、この連声は能の方の発音も全く同じで、能楽を特徴づける発音としてよく知られているものである。また、古典の八行四段動詞の終止連体形の

「使う」や「歌う」を「ツコー」「ウトー」と才段長音に発音するのは、他と違い、口語でも近世後期頃までは一般的に用いられていた発音のようであるが、これも狂言の発音に残っている。

以上は、現代の狂言で大蔵流・和泉流共通の事実であるが、片方の流派、あるいは同じ流派の一部の家のみに残されている発音もあるようである。その一つは、中国から輸入された漢字音の中で、末尾部分が子音の *t* であったもの、いわゆる「*t* 入声」と呼ばれるもので、この発音を能の世界では歴史的に「吞む」あるいは「含む」と称して現代に伝えているが、現代の狂言では、大蔵流の山本東次郎家だけが残している発音である^(注1)。また、文法とも関連して来るが、打消仮定の「読マズバ」「知ラズバ」は中世末期頃までは、「読マズワ」「知ラズワ」とバが濁らない発音であり、これも大蔵流の山本東次郎家だけが残しているものである。*t* 入声と打消仮定の具体例を次に示しておこう。

◇おおそれぞれ、男の心と大仏の柱は、太うても太かれと申す。

◇さてもさても、ご夢想のお妻は格別な。

◇さりながら、これは問うて見ずはなるまいが、

◇さてそれならば、お迎いを進ぜずはなるまいが、

これらは「因幡堂」という曲からの引用であるが、第一例と第二例が「吞む」発音、「含む」発音で、それぞれ、「男の心とダイブツの柱は」「ご夢想のお妻はカクベツナ」と発音している。

また第三例と第四例が打消仮定の言い方で、「問うてミズワなるまいが」「お迎いをシンゼズワなるまいが」と発音する。この古い発音を残している大蔵流の山本東次郎家は、近世末期発祥の比較的新しい家柄であるが、代々「能の狂言」を標榜しており、実際その芸質はどの家よりも能に近い、非写実的なものになっている。この二種類の発音は、能の発音にも明確に残されているので、山本家にこの発音が残っているのも不思議ではないと考えられる。

次に、(b) は、中世中期頃から末期頃にかけての口語の文法的特徴と、現行狂言のことばの文法的特徴を比較したものである。

一見して分かるように、文法事項に関しては、音声事項と違って、中世末期頃までの文法的事実の多くを、大蔵流・和泉流ともかなり忠実に継承している。具体的には、まず「致して」を「イタイテ」、「許して」を「ユルイテ」と言い、「呼んで」を「ヨウデ」、「頼んだ」を「タノウダ」と言う「サ行イ音便」および「バ・マ行ウ音便」が現行狂言でもよく用いられ、活用の種類の方では、古典の二段活用、ナ行変格活用がそのまま残されている。また、意志・推量の表現のうち、「見る」「為る」などの場合は、現代語では助動詞の「ヨウ」を用い、「ミヨウ」「シヨウ」などとなるところを、狂言では「ミヨウ」「シヨウ」などと拗音に、つまり助動詞の「ヨウ」がはっきりと確立していない形で用いるのが特徴である。これも中世末期頃の京

(b) 文法事項 (中世中期～末期)

* サ行イ音便「致イテ」「許イテ」	○	現行大蔵流	○	現行和泉流
* バ・マ行ウ音便「呼ウデ」「頼ウダ」	○		○	△
* 二段活用「落ツル」「負クル」	○		○	○
* ナ変活用「往ヌル」「死ヌル」	○		○	○
* 意志・推量表現「見ヨ」」「為ヨ」	○		○	○
* 原因・理由を表す接続助詞「ホドニ」「ニヨツテ」	○		○	○
* 連体形準体法「為ルワ」「成サルルモ」	○		○	○

都のことばをそのまま現代に伝えているものである。また、原因・理由を表す接続助詞は、現代共通語では「カラ」「ノデ」を用いるが、狂言でこれに相当する言い方は「ホドニ」と「ニヨツテ」であり、これも中世末期頃の口語の実態に合致している。さらに、現代では「スルノワ」「ナサレルノモ」というふうに、準体助詞「ノ」でつなぐ表現が、狂言では「ノ」を介さない形、すなわち連体形準体法を用いて「スルワ」「ナサルルモ」と表現しているのも、中世語の伝統である。これらの項目は、国語史的に見ても重要な文法事項であるが、狂言ではいずれも中世語をほとんどそのまま継承していると言える。また、これらに関しては流派や家柄による違いも目立たない。ただ最初の「サ行イ音便」だけは、和泉流にかなり特徴があるようなので、後に少し触れたいと思う。

三 狂言ことばの変遷 (二)
— 当代語の摂取 —

次に、狂言ことばの変遷の第二の類型、すなわち時代とともに変容して行くことばの新たな摂取について見て行きたいと思う。

その(一)と(二)は、既に早くから指摘されている、「ゴザル」「マスル」という敬語の用法である。これも簡単にまとめると次のようになる。記号の●はその表現に固定して用いられる場合、◎はその表現が優勢である場合、△はその表現が劣勢である場合、×はその表現が僅少であるか、または用例が無い場合を示す(以下同様)。

(一) 尊敬語「ゴザアル」から「ゴザル」へ(各流)

近世前期 近世後期

ゴザアル

△

×

ゴザル

◎

●

(二) 丁寧語「マラスル」から「マスル」へ(各流)

近世前期 近世後期

マラスル

◎

×

マスル

△

●

(一)の「ゴザル」の場合は、近世前期の資料では、各流派とも「ゴザアル」という一時代前の語形が、まだかなりの勢力を持っていたが、近世後期の資料では、「ゴザル」専用となっている。これは、「ゴザアル」から「ゴザル」へという口語の変遷をそのまま受け入れたものと考えられる。(二)の「マラスル」の場合も、これとほぼ同様であるが、近世前期にはまだ新しい形の「マラスル」の勢力は弱かったという点が少し違っている。

ところで、狂言における「ゴザアル」から「ゴザル」、「マラスル」から「マラスル」への当代語の摂取がいつ頃なされたかについては、明確なことは分かっていないようであるが、それに関してここに興味深い狂言資料がある。それは享保年間(一七一六―一七三六)の前半(一七二四年以前)に書写された鷺流『保教本』である。この本は鷺流の分家である伝右衛門家の第

三代当主であった保教という人が書いたもので、セリフはもちろん、演出などが非常に細かく注記されており、鷺流の狂言を知る上で最も重要な本の一つになっているものである。さらに興味深いのは、この中に、他の狂言の流派の演出やセリフを注記した部分が、全部で三百数十カ所あり、その大部分が大蔵流に關してのものだと言うことである。これによって十八世紀前半の大蔵流の狂言の実態を、断片的にはあるが、知ることが出来るようである。この本に見られる大蔵流に關する注記を、それ以前の大蔵流の本と、それ以降の大蔵流の本と比較してみると、この場合、一六四二年書写の『虎明本』と、一七九二年書写の『虎寛本』が比較の対象ということになるが、演出に關しては、具体例は省略するが、どちらとも共通点はあるけれども、どちらかと言うと『虎寛本』の演出に近いと言えそうである。一方、セリフの部分はどうかと言えば、次のような注記が目される。

◇大倉ニハ石ガウイテ御座ルト云(八幡前、卷三・一〇〇頁)

◇大倉ニハ爰ニテ出家ノ事デ御座レバ経ヨリ外ハ覚マセヌ経

ヲ誦マセウカト云

(地蔵舞、卷四・二二九頁)

この本全体で、大蔵流の用語に關する注記のうち、「ゴザル」は一例、「マラスル」も一見られるが、古い「ゴザアル」「マラスル」は一例も出ていない。近世前期の『大蔵虎明本』では、「ゴザル」とその古い語形である「ゴザアル」が共存し、「マラスル」よりもその古い語形である「マラスル」の方が優勢である。

まず(三)であるが、狂言で用いられる最高敬意を表す二人称代名詞には「コナタ」と「オマエ」があるが、この用いられる方は流派によって違っており、大蔵流がほぼ「コナタ」専用であるのに対して、和泉流の場合は、近世前期は「コナタ」専用であるが、後期には「オマエ」という代名詞もある程度用いられるようになる^{注20}。ちなみに口語ではどうであったかと言え、最高敬意を表す二人称代名詞は、中世後期の頃には「コナタ」であったのが、近世前期には「オマエ」がこれに取って代わり、「コナタ」は敬意を一段落として、最高敬語ではなくなっている。狂言では、大蔵流はこの口語の変遷に乗らず、中世の「コナタ」を継承し続けるが、和泉流では、「コナタ」を継承するのと平行して、新しい「オマエ」も採用して、両者ともに最高敬意の二人称代名詞として用いている。ただ、この二つの代名詞の用いられ方は少し違っており、「コナタ」は、登場人物同士が、お互いを十分な敬意を持って遇する関係にある場合に用いられることが多く、「オマエ」は例えば、太郎冠者から主人へのセリフの中で用いられるように、甚だしく身分差がある場合の、下の者から上の者へのことばとして用いられることが多いようである。

同じようなことが、(四)敬語助動詞「シャル」「サシャル」の場合にも言えるようである。すなわち、和泉流では、近世前期の「セラルル」「サセラルル」専用から、近世後期にはそれらの変化した形である「シャル」「サシャル」もある程度用い

られるようになる。これも二つの助動詞の用いられ方が少し違っており、太郎冠者から主人へのように、甚だしく身分差がある場合の、下の者から上の者へのことばとしては、「セラルル」「サセラルル」を用いて、「シャル」「サシャル」は用いないという傾向があるようである。

これら(三)と(四)では、大蔵流は結果的に近世期の新しいことばを採用しなかったことになるが、大蔵流が新しい口語の採用に常に消極的な態度で臨んだかと言うと、必ずしもそうではないようである。次の(五)を見られたい。

一つは、四段動詞やナ行変格活用動詞以外の命令形の語尾である。例えば下二段動詞「出る」の命令形「出よ」や、上一段動詞「見る」の命令形「見よ」は、口語の流れでは、近世初期から中期にかけて、それぞれ「出い」「見い」と現代上方語と同じ形に変化するが、この変化を受けた形で、近世後期の『虎寛本』では一部これらの新しい形を採用している^{注21}。同じことが、使役の助動詞「スル」「サスル」にも言える。この助動詞はもともと下二段活用であったが、近世前期口語では次第に四段化して来る。『虎寛本』ではこれを一部撰取し、近世前期の『虎明本』では、「持たしよ」であったものが『虎寛本』では「持たそう」という例も現れるようになってくる。この助動詞が「聞かそう」という例も現れるようになってくる。

紙幅の都合で、この程度でとどめておくことにするが、近世後期の狂言本は、近世前期頃に起こったさまざまな口語の変化

(五) 大蔵流における近世上方語の撰取

『虎寛本』(二七九二年)

* 動詞命令形語尾「ヨ」から「イ」へ

◇ 藤六、それへ出い。(「麻生」、上・一〇九頁)

◇ 此重の内の物じや。推して見い。(「栗焼」、中・二九頁)

* 使役助動詞「(サ)スル」の四段化

◇ 今度はそなたに持たさう。(「三本の柱」、上・一一九頁)

◇ 身の上をいふて聞かさう。(「えびすびしやもん」、中・二〇〇頁)

に対応して、新しいことばをいろいろと撰取しているのは間違いないところである。ただし、それにも限界があり、近世期に現れ、現代上方語では普通に用いられるようになった新しいことばで、狂言が採用しなかったものも少なくない。例えば、二人称代名詞「アナタ」、これは口語の歴史では「オマエ」の後に生まれ、その最高敬語の位置を奪った代名詞であり、文献には十八世紀中頃になって用いられるようになる。また敬語の動詞・補助動詞として用いられる「ナハル」、打消助動詞の「ヘン」、人名のあとに用いられる敬語の接尾語「ハン」なども、十八世紀中盤頃から少しずつ文献に現れるものであるが、やはり狂言では用いられない。さらに、原因・理由を表す接続助詞「ヨツテ」「サカイ」という表現は、それまでの「ニヨツテ」「ホドニ」に代わって口語で用いられるようになったものであるが、

狂言ではやはり採用されず、「ニヨツテ」「ホドニ」を使い続けることになる。これらを見ると、総じて近世中期、十八世紀中頃に口語として登場してきたことばは、狂言では採用されないという事実が認められるようである。もう一つ、逆接確定の条件句に用いられる接続助詞の「ケレド・ケレドモ」は、既に近世前期には登場し、十八世紀前半には口語として一般化し、現代に至っていることばであるが、これも採用されずに終わっている。

四 狂言ことばの変遷(三)

— 前時代のことばへの意図的回帰 —

さて、次に類型の三番目、狂言ことばの前時代語への意図的

回帰について考えてみたいと思う。まず、次の(二)の尊敬語・丁寧語「オリヤル」「オヂヤル」の変遷を見られたい。

(一) 尊敬語・丁寧語「オリヤル」「オヂヤル」の変遷

近世前期

近世後期

現行

大藏流・和泉流

オリヤル(拮抗)

オリヤル(専用)

オリヤル(専用)

c f. 『狂言記』

オリヤル(劣勢)

(正篇)

オヂヤル(優勢)

この二つの敬語は「ゴザル」と意味・用法が同じもので、「ゴザル」より敬意の低いことばであるが、「オリヤル」が中世中期頃に、「オヂヤル」が中世後期頃に生まれたものである。

それが、近世前期には、「オヂヤル」の方が勢力が強くなっており、その口語の実態を反映しているのが、ここに出している『狂言記』(正篇、一六六〇年)だと考えられている。一方、当時の大藏流や和泉流の本の実態は、両者がほぼ拮抗しており、『狂言記』よりは少し以前の口語に近いと考えられる。ところが、

『狂言記』よりには少し以前の口語に近いと考えられる。ところが、このように近世の狂言諸本で、新しい「オヂヤル」が勢力を強めていたにもかかわらず、近世後期以降の狂言では、一転してそれを捨ててしまい、より古い成立の「オリヤル」に戻ってしまった形になっている。この実態を明らかにして、それを鮮やかに解釈したのが、初めに触れた亀井孝氏である。亀井氏

は、一旦採用した「オヂヤル」を排し、より古い「オリヤル」に統一してしまったのは、「オヂヤル」の口語としての生々しさ、卑俗さが、伝承芸能として固定期に入りつつあった狂言のことに相応しくないものと判断され、より古雅な語感をもつ「オリヤル」が意図的に復活させられたためではないかと考えられた。この解釈は全く正しいと思われる。これが、亀井氏の言われる「復古的修復」「擬古的粉飾」ということである。

なお、「オリヤル」の意図的復活がいつ頃なされたかは明確になっていないが、先述の鷲流『保教本』に見られる大藏流の用語に関する注記が示唆的である。ここには、

◇大倉二八下ニヲリヤレト引スユル

(朝比奈、卷四・一六八頁)を含め、二例の「オリヤル」が引かれ、「オヂヤル」の用例は

見当たらない。すなわち、「ゴザル」「マスル」と同様、近世後期の『虎寛本』と同じ特徴が見られるのである。大蔵流では、十八世紀初期には「オリヤル」への意図的回帰が既になされていたことを窺わせるものであろう。

このように、一旦衰えた用語、あるいは使用されなくなったことばを意図的に復活させて用いるという例は、たくさんあるわけではないが、これに類するもので、筆者の気づいたものが二つほどある。次の(二)(三)を見られたい。

	(二) 和泉流のサ行イ音便		
	近世前期	近世後期	現行
イ音便	●	×	△
原形	×	●	◎
(三) 和泉流の軽度敬語表現「オ〜ヤル」	近世前期	近世後期以降	
行く・来る	オリヤル・オヂヤル	オリヤル・オイキヤル	
居る	オリヤル・オヂヤル	オイヤル	
言う	オシヤル	オシヤル・オイイヤル	
為る	メサル(ル)	メサル(ル)・オシヤル	

まず(二)は、和泉流狂言におけるサ行イ音便の使用状況を時代的に見たものである。サ行イ音便は、近世前期の本では音便化しやすいものは、ほとんど音便化しているが、近世後期には逆にほとんど音便形が用いられなくなっている。これは、中世末期まで盛んにイ音便を起こしていたものが、近世前期にはほとんど起こさなくなるという口語の変遷を如実に反映したものと考えてよいと思われる。それが、現行の狂言では量的には

劣勢ではあるが、イ音便形がかなり使われるようになっているのである。これも、一旦使用されなくなった用法の復活として第三番目の類型に入れることができると思う。なお、サ行イ音便の復活の理由については、また後程触れたいと思う。

次に(三)は、同じく和泉流狂言における用法で、軽い敬意を表す「オ〜ヤル」という言い方に関する用法である。「オ〜ヤル」の「〜」の部分には動詞の連用形が入り、「読む」であれば、

「オヨミヤル」、「飲む」であれば、「オノミヤル」と拗音に発音する。この言い方は、他の大蔵流や鷲流でも全く普通に用いられるものであるが、「行く」「来る」「居る」「言う」「為る」などの特定の語の場合は、「オウヤル」という言い方は普通せず、「行く・来る・居る」の場合は、前にも見た「オリヤル」または「オヂヤル」を用い、「言う」の場合は「オシヤル」、「為る」の場合は「メサル」または「メサルル」を用いるのが、近世前期の狂言本の用法であった。ところが、近世後期以降の狂言本では、傍線を引いた「オイキヤル」「オイヤル」「オイイヤル」「オシヤル」という言い方も現れて来ている。特に、「居る」の場合は、「オイヤル」だけになっている。これは、近世後期以降の和泉流の狂言師たちが、「オウヤル」という用法がすべての動詞に適用できるものと思ひ込んで、そのような言い方を採用したものと考えられるが、実際には近世前期の狂言本には存在しない言い方であったわけで、結果的に全く人工的な語形が生まれることになったのである。なぜ、このようなことになったかと言えば、実は近世前期の上方口語においては、頭のオが落ちた「ウヤル」という敬語の用法が盛んであって、「行く」の場合は「イキヤル」、「居る」の場合は「イヤル」、「為る」の場合は「シヤル」と盛んに言っていたのである。そこで、当時の和泉流の狂言師たちは、この言い方を聞いて、これらの頭に「オ」を付ければ、一時代前の狂言のこばに合致すると考え、一律に「オ」を付けてしまった結果、それらの人工的な語が生

まれたと考えられるわけである。つまり、あることばの言い方を、それより古い言い方、または本来の言い方に戻そうとして、実際は現実に無かった言い方を作り出してしまったことになる。言語の学では、このような言葉の変化を「誤った回帰」とか「過剰訂正」と言うのは周知のところである。亀井氏が指摘された「復古的修復」「擬古的粉飾」の例は、かつて一度は実際に使用された言い方への回帰であり、この場合とは厳密には異なるのであるが、狂言師たちが意図的に復古的修復を加えたという点では同じだと言える。

五 狂言ことばの変遷の要因

以上、狂言ことばの変遷の実態の一端を、亀井氏の三つの類型に関連づけて明らかにして来た。最後に、これらを含めたさまざまな狂言ことばの変遷をもたらした要因について考えてみたいと思う。

まず、第一の要因にあげられるのは、これまでも何度も触れているが、狂言ことばの変遷と平行する口語の変遷の影響である。そもそも狂言という芸能は、中世に即興的な口語劇として発達してきたものである。ある時期までは、口語が変われば、それに従って狂言のことばも変わるといった性格のものだったと考えられる。しかし、そのうちに伝承という性格が加わり、狂言のことばは複雑になって来る。一方では、狂言を見てくれ

る目の前の観衆に十分理解されるようなことばを用いることが要求され、一方では前の時代から引き継いできたことばを用いる必要がある。狂言ことばの変遷というのは、まさにこの当代口語と伝承用語のせめぎ合いの歴史と言つてよい。このような性格をもつ伝承芸能は、ほかに無いと考えられる。能の場合は、もともと口語からは距離のあることばであつたし、近世前期から盛んになった歌舞伎・浄瑠璃の場合は、狂言に比べてはるかに歴史が浅く、そのことばは、中世後期から近世初期にかけて起きた大規模な口語の変化が終わつたあとに確立したものであるので、狂言ことばの複雑さと比べることはできない。問題は、どのようなことばを継承し、どのようなことばを改新して行くかということであるが、これは今までに見て来たようにさまざまであり、流派や家の単位でもかなり違つている場合がある。流派別では、概して言えば大藏流や鷺流が前時代語の継承という意識が強く、和泉流は当代語の摂取に積極的と言つてよさそうである。「不即不離」ということばがあるが、このことばに引き付けて言えば、大藏流・鷺流は口語の変遷に対して「不即（即かず）」の態度に傾き、和泉流は「不離（離れず）」の態度に傾いていたと言えそうである。また、この理由については、大藏・鷺流が幕府の式楽となり、能とともに、伝承ということが強く意識されたのに対し、和泉流は禁裏御用を勤めていたが、皇室の式楽は言うまでもなく雅楽であり、能楽は慰みの対象とされていたことと無関係ではないと考えられる。ま

た、大藏流・鷺流の狂言師たちは、もともと奈良や京都で活動していたが、江戸幕府の成立以降、庇護者である徳川家に従い、十七世紀後半頃から江戸での活動が普通となつた。そうすると、狂言を見る観客のことばというものは、最初から京都のことばとかなり違うものだったことになるので、当時の口語の変遷、それは京都のことばの変遷ということになるが、それに対してそれほど敏感にならなくても構わなかつたということも考えられるであろう。これに対して、和泉流のことばが口語の変遷に敏感だつたのは、口語が変わつて行く、そのまさに足元の京都を活動の舞台としていたためであると考えたいと思う。

このようなわけで、狂言ことばの変遷の要因は、一口に口語の変遷の影響と言つて差し支えないのであるが、ほかに全くないというわけでもない。その一つが、流派同士の影響である。近世期の大藏・鷺・和泉の三流派は、それぞれお互いの芸を意識しながら活動していたと考えられる。よく知られたことであるが、大藏流宗家第十三代の虎明は、鷺流を強烈に意識しており、その著『わらんべ草』（一六六〇年）で、鷺流の俗受けを狙つた演出を批判している。その鷺流の分家の保教が大藏流や和泉流を意識していたことは、前述の通りである。和泉流も他の流派を意識していたはずで、その痕跡が、近世初期の本である『天理本』（寛永年間頃）や『和泉家古本』（天和年間頃）にあり、わずかず教箇所ではあるが、大藏流宗家の演出について記述しているところがある。このようにお互いの流派を意識する

ところから、自分の流派にない曲を、他の流派から貰い受けた
り、演出方法を学んだりすることがあったようである。ただ、
ことばの用法で、他の流派の影響を直接に受けて、その流派と
同じ用法になったと断言できるものを見つけないのは難しい。例
外的にそうなのではないかと思われるものの一つが、次の(二)
の仮定条件表現に関するものである。

(一) 仮定条件表現

	近世前期	近世後期
大蔵流	タラバ	タナラバ
鷺流	タラバ	タナラバ
和泉流	タラバ	タラバ
※口語の流れ	タラバ	タラ(バ)

これは、現代語で「学校へ行ったら(ば)」「学校へ行つたな
ら(ば)」に相当する表現であるが、近世前期の狂言では、もつ

(二) 現行和泉流のサ行イ音便

※『新撰狂言集』(野村萬齋(六世野村万蔵の父)著、五十曲、一九二九年)

イ音便、八三例 「致す」六三例、「差す」一二例、「出来す」三例

原形、一九三例

ばら「タラバ」と言っており、それは当時の口語も同じであつ
た。ところが、近世後期の本では、大蔵流と鷺流が足並みをそ
ろえて「タナラバ」と変化している。一方和泉流は前期の本の
ままで、当時の口語の方も最後の助詞「バ」を落とす言い方が
普通になっているが、「タナラバ」はほとんど用いられていない。
そうすると、大蔵流と鷺流は当時の口語とは無関係に、同じ言
い方に変化したことになる。当然、どちらか一方がもう一方の
影響を受けたものと考えられるわけで、それは、これまでに見
て来た大蔵流と鷺流をめぐるいきさつからして、鷺流の方が、
先に「タナラバ」と変わっていた大蔵流の言い方を借用したも
のと考えるのが自然ではないかと思う。それからもう一つ、こ
れは近代になってからのことであるが、前にも見たように、和
泉流では近世後期にいったん廃したサ行イ音便を復活させて用
いるようになった。その理由であるが、まず次の(二)を参照
されたい。

この『新撰狂言集』という本の詞章は、和泉流野村万蔵家の現行狂言のものとはほとんど同一のものである。この本の二冊ある第一冊のサ行イ音便の実態を示したものが、右の数字である。イ音便は全体の三割ほど用いられているが、その用いられ方に特徴があつて、その大部分が「致す」という語に現れている。

これが何を意味するものかと言へば、「致す」は狂言の詞章にもっとも頻繁に現れるサ行四段動詞であり、狂言の始まり部分である名乗りから、繰り返し使用されることばである。したがつて、それをイ音便で発音すると、いかにも狂言らしい発音が一曲全体に行き渡っているように感じる。「致す」にイ音便が集まるのは、このような理由からだと思われる。このようにいったん衰えたイ音便が近代になって復活してきたのは、大蔵

流の影響ではないかと考えられる。和泉流の野村万蔵家は、もともと加賀前田藩のお抱え狂言師の家柄であるが、幕末の頃から江戸・東京在住で、大蔵流の山本東次郎家も、やはり幕末より江戸在住の境遇にあつた。この両家は、近代以降、東京における和泉流と大蔵流を代表する家柄として並び称され、流派は違ふけれど、お互いを相当意識していたようである。そこで、和泉流の野村万蔵家が、いかにも狂言らしい用法としてのサ行イ音便を専ら用いる大蔵流の山本東次郎家に影響されたことは考えられないことではないと思われる。

さて、狂言ことばの変遷の要因として、もう一つ考えてもよいと思われるのが、狂言ことばの（地域性）の問題である。

まずは、次の用例（一）を見られたい。

（一）鷲流『保教本』の「借りる」

- ◇ 此上ハカソウト借^{かり}ウガ借スマイ共借ウ（鞍猿、巻二・二二二頁）
- ◇ 此段ヲ申御人ヲモ借^{かり}テ参ラウト存ル（吟三郎、巻三・六九頁）
- ◇ 知ラヌ由デ宿ヲ借^{かり}テ見ウ（地蔵舞、巻四・一二三頁）
- ◇ 身ハ笠ニ借^{かり}居ルナラカマヤツソ（地蔵舞、巻四・一二六頁）
- ◇ 身ハ笠ニカリテイルヲカマヤツソト云（地蔵舞、巻四・一二六頁）
- ◇ 御貸シ被成テ下サレイト云テ借^{かり}テコイ（脱殻、巻四・二四九頁）

「カリテ」～五例、「カッテ」～三例

既に何度も引用した本であるが、鷲流の『保教本』の一部に、狂言のことばとしては異例な用法が見られる。最初の用例が特に注意されるもので、振り仮名に相当する部分に「カリヤウ」という表記があつて、これは上一段動詞の「カリル」の意志形と考えられる。異例な用法と言うのは、この「カリル」という語は、狂言ことばの基盤をなす京都など上方では通常用いられない、東日本の方言と考えられるからである。上方では一般に「カル」という四段動詞を用いる。また、第二例以下は、いずれも「カリテ」という語形であるが、これも上一段動詞「カリル」の連用形としてふさわしく、「カル」という四段動詞ならば、この当時上方では普通に促音便を起こして「カッテ」という形となつていた。『保教本』には「カッテ」という言い方も出てはいるが、「カリテ」の方が多くなつてゐる。これは、何らかの理由で、保教が東日本、直接には江戸の言い方である「カリル」の活用形を採用したものと考へて良いと思う。その理由であるが、保教は江戸生まれの江戸育ちであり、特に「カッテ」という語形は、現代共通語もそうであるが、江戸語においても、日常使うハ行四段動詞「買う」の促音便形と同じもので、意味的にも紛らわしいため、あえて狂言の伝統を破つて、「カリテ」の語形を採用したのではないかと考へられる。これが、自分自身の日常のことはが露呈したものか、それとも舞台下の観衆の理解を円滑にせしむるための配慮か、あるいはその両方かは定かではないが、江戸という地域に配慮した用法であろうことは

確かだと思われる。

さらにこれに類するのではないかという用法が、『保教本』にはもう一つある。それは、既に触れたサ行イ音便の現れ方である。次の(二)を見られたい。

近世前期の狂言本では、流派を問わずサ行イ音便が盛んに行われていたことは先に述べた。ところが、少し年代は下るが、この『保教本』では、原形の割合が三〇パーセントと、かなり高くなつてゐる。中でも「成す」「出す」といった二音節語に多くなつており、これはイ音便が最も盛んであつた中世末期の様相とも明らかに違つてゐる。この『保教本』の実態の意味するところは、やはり狂言の聞き手である観衆への配慮ではないかと思われる。それは、「成す」「出す」のイ音便形「ナイテ」「ダイテ」は、原形「ナシテ」「ダシテ」では起こり得ない、同音異義語の連想を引き起こすのである。「ナイテ」は「泣いて」、「ダイテ」は「抱いて」を連想するように。京都のことばでは、このイ音便形の伝統が強かつたが、江戸の口語では早くからイ音便形を用いなくなつてゐたようである。意味の取り違えを起こす可能性は高かつたものと思はれる。なお、ここでも「致す」のみは、圧倒的にイ音便形となつてゐるのも偶然ではないのかもしれない。ちなみに言えば、狂言ことばの地域性ということでは、現存最古の狂言本である『天正狂言本』(一五七八年奥書)に、かなり多くの東北方言が混入しているというよく知られた事実がある。これは、狂言師自身の東北なまりが反映している

(二) 鷺流『保教本』のサ行イ音便

◆音便形 三〇五例、◇原形 一三五例

差す ◆ 一八例、◇ 四例 致す ◆ 二三例、◇ 四例

成す ◆ 三例、◇ 一七例 直す ◆ 一〇例、◇ 三例

出す ◆ 四五例、◇ 三七例 済ます ◆ 一二例、◇ 三例

出來す ◆ 一八例、◇ 五例

c.f. 中世末期口語のサ行イ音便

*イ音便形が一般的なもの 差す・出す・成す・伏す・致す・直す・流す……

*イ音便形が稀なもの 押す・貸す・消す・減す・増す・示す……

*イ音便形が現れないもの 召す・申す・思し召す

ものと考えられており、地方で演じられる狂言には常にこのような可能性が考えられるわけである。

注(1) 語りや謡いなどの伝承性の強い部分では、野村万藏家など和泉流の狂言でも入声を残している。

(2) その早い例として、既に『和泉家古本』(承応〜天和頃)に最高敬意の二人称代名詞「オマエ」の用例が数例見られる。

(3) 拙稿「近世前期京阪語の命令形語尾「ヨ」「イ」について―古狂言

本を中心に―」(『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』所収、桜楓社、

一九八九年)

六 おわりに

以上、狂言ことばの変遷とその要因について、三つの類型をもとに、近世初期から現代までの資料を追いつながり考えてみた。内容が多岐に亘ったため、個々の資料の細かな実態については、触れ得なかつた部分も多い。今後、順次検討して行きたいと思う。

(さかくち いたる／本学文学部)